

## ゴームの足跡を求めて ヒストリオグラフィと文字資料の中のゴーム老王

小 澤 実

### はじめに

現在に至るまで継続するデンマーク王家の祖とされるゴーム老王は、10世紀前半から半ばにかけて、ユラン半島中央部に位置するイエリングを拠点として統治活動を行ったと考えられている<sup>(1)</sup>。チューラなる女性を妻とし在来宗教を奉じた彼は、デンマークにキリスト教を導入したハーラル青歯王の父であり、「老齢を人間に与えられた運命の限界までひきのぼし」たがために「老王」と渾名される<sup>(2)</sup>。そしてイエリングに妻を讃えるルーン文字を刻んだ碑を建て、息子ハーラルからは「王」として別の碑で顕彰された人物として、現在にまでその記憶を留めている<sup>(3)</sup>。

しかしながら彼の姿を伝える史料はきわめて限定されているうえに解釈上の問題点をいくつも含有しており、いまなお歴史家による接近は容易ではない。しかしながら近年のヴァイキング期を対象とする諸分野の研究は、イエリング王朝成立期という曖昧模糊とした時期のデンマーク社会の解明に資する有益な情報を提供しつつある<sup>(4)</sup>。本稿はそのような成果を摂取し、10世紀におけるデンマーク社会それ自体そしてデンマークと周辺諸国との相互作用に注目することで、ゴームの生涯にかかわるいくつかの問題点を検討することを目的とする。

### 第1章 ゴームをめぐるヒストリオグラフィ

(1) ハーラルの陰で

歴史上イエリング王朝の開祖という重要な地位

を与えられてきたにもかかわらず、ゴームをめぐる研究はかならずしも深化してこなかったと言わなければならない。もちろん、従来の歴史研究に対して徹底的な史料批判をもって応えたラウリッツ・ヴェイブル以来、歴代のデンマーク史家たちはその叙述から国祖ゴームを除外したことはない<sup>(5)</sup>。ただしそこで描かれる人物像は大枠としてヴェイブルによる再構成に異を唱えるものではなく、彼が産み出した「力溢れる国王」というイメージを再生産してきたと言える<sup>(6)</sup>。しかしそれは彼らの怠慢でもなければヴェイブルへの遠慮でもない。ゴームへの接近を阻む四つの理由を挙げてみたい。

一つは、彼に言及する史料が質量ともにきわめて貧しく、加えてそれぞれが単純な解釈を拒む問題点を抱えていることである。当該時期のデンマークを含めたスカンディナヴィア世界には、正確な年代決定の困難なルーン碑文とスカルド詩を除いて文字資料が伝来していない<sup>(7)</sup>。そのため当該地域内のとりわけ編年作業が大きな意味を持つ政治的状況を再構成するにあたっては、イングランドやドイツのような文筆文化の進展した外部地域で主として聖職者によって記録された年代記等の情報か<sup>(8)</sup>、北欧内で12世紀以降になって執筆もしくは編纂されたサガ史料群や年代記に依拠せざるをえない<sup>(9)</sup>。そこには情報伝達過程におけるいくつかの障壁があり、事実へと迫る手続きには細心の注意が要求される。

二つ目は、ゴームの息子ハーラル青歯王によって達成された事績のもつインパクトである。周知のようにハーラルは、「全デンマーク、そしてノル

ウェーを手中にし、デーン人をキリスト教徒とした」王として、デンマーク史における一つの画期を生み出した人物と位置づけられている<sup>(10)</sup>。イエリングの碑文で宣言されるこのデンマークの統一、ノルウェーの支配、デンマークのキリスト教化という三つの政治的行為に加え、年輪年代学の発展によって明らかとなったように、デンマーク全体で四箇所発見されているトレレボリ型円形要塞やイエリング近郊ラウニン・エンゲの木製橋のような大規模そしておそらくは軍事的建造物もハーラル治世期に帰される<sup>(11)</sup>。たしかにデンマーク王権の充溢期であったと判断させる諸事績であるが、それはデンマーク史研究者の多くの関心をゴームを素通りさせてハーラルへと向かわせる結果となった。

三つ目は、ハーラルの歴史的役割を後世により印象的に伝達する源泉となったアダム・フォン・ブレーメンによる、『ハンプルク大司教事績録』(以下『事績録』)での各人物の位置づけである<sup>(12)</sup>。アダムそして彼の属していたハンプルク＝ブレーメン大司教座にとって、ハーラル青歯王はキリスト教へと改宗しデンマークへのキリスト教導入の礎となった記念すべきキリスト教君主である<sup>(13)</sup>。スカンディナヴィア世界へのキリスト教敷設を存在理由としていた当該大司教座にとって、ハーラルはその政策を完遂させるためにあたって不可欠の存在であった。そのため、ハーラルとは対照的にキリスト教を拒んだゴームは『事績録』において息子の事績を引き立たせるための位置を与えられているに過ぎず、おそらくは情報提供者であるスヴェン・エストリズセンからある程度聞きえていたと考えられるゴーム治世期の情報も、アダムの価値判断というフィルターを通すことによってそこに書き記されることはなかったと考えられる<sup>(14)</sup>。

さて、最後に挙げられるのは、息子ハーラル自身による「歴史の改竄」である。ゴームは長年彼の眠っていたイエリングを拠点として統治活動をおこなっていたと考えられる。しかしながら次章第5節で検討するように、現在あるイエリング遺構は決してゴーム期の姿をそのまま留めているわけではない<sup>(15)</sup>。南北二つの墳丘、大小二つの碑文、そして墳丘の間に建つ教会という印象的な遺構配

置はハーラルによるものであり、そこには導入されて間もないキリスト教の影響が色濃く反映している。これは非キリスト教的デンマークの中核であったイエリングを「キリスト教化」することで自らの存在意義を周知させようとしたハーラルの演出であり、考古学者E・ロエスダールはその過程をハーラルによる「第四の事績」と呼んだ<sup>(16)</sup>。しかしながらその一方で、ハーラルによる演出の中へと組み込まれた、より具体的に言うならば二つの墳丘の狭間に建立された教会の中へ移葬されたゴームは、自らの治世痕跡を封殺されてしまった。ゴームの名はイエリング遺構とともに想起されるものの、それはハーラルに支配された姿なのである。

以上指摘した四つの理由が相乗することによって、ゴームはその歴史上持つべき地位に反し、なかば忘却された存在としてヒストリオグラフィの狭間を彷徨っていた。しかしながら、ハーラル青歯王、スヴェン叉髭王、クヌーズ(クヌート)大王と続くデンマークにとっての一大変革期を解明するためにも、出発点としてのゴームの治世を疎かにすることはできない。息子ハーラルによって「埋葬され」たゴームを、歴史の棺から引き出さねばならない。

## (2) ソーヤー夫妻の研究

以上デンマーク史学のなかではいささか沈滞気味であったゴーム治世期デンマークの研究に再考を促すきっかけとなったのがソーヤー夫妻による一連の研究である<sup>(17)</sup>。『事績録』をはじめとする歴史叙述の見直し、イエリング遺構の発掘の進展、そして碑文研究の精緻化をその背景とする両者の研究の中でも、2003年に世に問われた『イエリング王朝再訪：ゴーム無き歴史か』と題された論考は旧論の集大成とも言える<sup>(18)</sup>。提示されるのはいささか挑発的で極端と言ってもよい解釈ではあるものの、いくつもの点で示唆に富む論考である。

夫妻による研究の考察対象は王であったゴームではなく彼の妃チューラにある<sup>(19)</sup>。近年の歴史学研究では国王だけではなく、彼による統治活動の枠組みの中でその妃の果たした役割にも目を向けつつある<sup>(20)</sup>。これは女性史もしくはフェミニズム歴史学の隆盛に棹さしてのことであるが、

ソーヤー論文でもチューラに焦点を当てることにより、ゴームの治世と役割においても従来描き出されてきた世界とは全く異なる世界が拓けてくる<sup>(21)</sup>。本稿と関わる範囲で、注目すべき論点を二点引き出してみたい。

第一点はチューラの出自に関わる。問題の原点はイエリングの小碑文に記された「デンマークの誉れであるチューラ」という表現にある<sup>(22)</sup>。多くの研究者はここにある「デンマーク」という表現をユラン半島、フン島、シェラン島そしてスコネを含む中世デンマーク王国と同一視していたが、近年の研究に拠ればこれを「デーン人」の「マルク」、つまり「デーン人の辺境」を指す表現として理解すべきであるとする<sup>(23)</sup>。この解釈を受け入れるとすれば、ゴームとチューラが結婚した十世紀前半のデンマークは中世まで不変である統一的な領域であると無条件に前提とすることはできず、少なくとも政治的単位としてデーン人の住むユラン半島とフン島からなる西部と、シェラン島以东からなる東部に分離していたとしなければならない<sup>(24)</sup>。このような現状を想定した上で再び碑文の表現に戻るならば、チューラはデンマーク東部の、おそらくは大豪族の首長の娘であったために、ゴーム家門側から「デーン人の辺境の誉れ」との表現を冠されることになったと解釈されうる。こうした有力者間の婚姻の常として、ゴームとチューラの結婚とは両家門間の政治的紐帯の確認と考えるのが自然であり、それは東西有力者のおそらくは緩やかな連合へと結果したはずである<sup>(25)</sup>。B・ソーヤーは更に踏み込んで、デンマーク東部の継承権こそがチューラの嫁資であり、息子であるハーラル青歯王がそれを継受することによって東西デンマークの統一が成立したと推論する<sup>(26)</sup>。

第二点は、チューラという人物の同定作業である。チューラという名を記す碑文はイエリングのみに留まるわけではなく、デンマーク全体で七つある。その中の二つはイエリングの両碑文であるが、残り五つのうち三つはラヴンの子孫であるチュエというやはりユラン半島中部の有力豪族にかかわる碑文である<sup>(27)</sup>。この三つもやはりチューラという名の妻を記念する碑文である。従来チューラという女性名は当該時代において稀少

ではないという点から、ゴームの妻であるチューラとチュエの妻チューラは別人と考えられてきた。しかしB・ソーヤーは、そもそも女性を碑文で顕彰することが稀であることやチューラを埋葬した墳墓がイエリングに存在しないことを根拠として、チュエの妻となったチューラがゴームの妃チューラではないとする証拠はないとする<sup>(28)</sup>。つまり両者が同一人物であり、チューラがゴームとチュエという二人の人物と結婚した可能性が高いということになる。彼女の議論は更に進み、碑文を建てるという行為が単なる死者の記念に留まることはなく、残された親族らによる権利主張（とりわけ土地財産）に利用されているという成果を踏まえ<sup>(29)</sup>、ゴーム家門とラヴン家門は実はデンマーク内の政治的主導権、とりわけ「デーン人の辺境」をめぐる競合関係にあり、両家門が建立した碑文はそれぞれの立場を主張するためにそれぞれの権力中核地に設置し他者に誇示したものとする<sup>(30)</sup>。

多くの点で推論に頼らざるを得ないソーヤー夫妻による解釈を全て受け入れることに対してはやや躊躇を覚える。とりわけ第二点のチューラの同定作業に関しては、B・ソーヤーの雄弁さにもかかわらず危ういと言わねばならない。しかしながら碑文史料を積極的に利用することによってチューラに焦点をあてた夫妻の研究により、私たちはゴーム治世をめぐる研究に新しい光を呼び込むことができたのも確かである。とりわけ、ゴーム期のデンマークが必ずしも統一された状態にはなかった点、その時代にあってイエリングに拠点を置くゴームのみが独占的な権力を保持していたわけではない点は、従来のヒストリオグラフィに対して大きな反省を迫る指摘であり、本稿においても幾度も立ち返るべき成果である。

## 第2章 五つの焦点

本章ではゴームの治世をめぐる論点を五つ抽出し、それにまつわる研究史と史料を再検討することを目的とする。

### (1)「ヘゼビュー国家」との関係

ゴーム自身の治世について考察する前に、それ

以前のデンマーク国家体制、とりわけ「ヘゼビュー国家」との関係を整理しておかなければならない。

「ヘゼビュー国家」とは、ユラン半島南端部バルト海側に位置する商業中心地ヘゼビュー（ドイツ名ハイタブ）を拠点として一定期間継続した有力家門オーラヴ家による支配体制を指す<sup>(31)</sup>。アダムの情報源であるスヴェン・エストリズセンの言葉に従えば、オーラヴは「Sueonia」から来訪し、それ以前デーン人を支配していたヘルギにとって代わることで王となった<sup>(32)</sup>。その後、彼の息子のグヌーパ、その息子のシグトリュグがオーラヴの地位を継承したことは、アダムの記述に加えてヘゼビューに残る二基のルーン碑文から確認することができる<sup>(33)</sup>。

この「ヘゼビュー国家」をめぐるのは、以前より二つの大きな問題が提起されている。一つはオーラヴの出自である。前述したように、アダムはオーラヴが「Sueoniaから来訪し」と伝えており、かつてはこの文言を根拠として「ヘゼビュー国家」をスウェーデン人によるデンマーク支配の時期と解釈していた<sup>(34)</sup>。しかしながら、この定説に歴史学的視点から徹底的な批判を加えたのがN・ルンである<sup>(35)</sup>。彼は複数の状況証拠からアダムの証言を信用することは困難であるとし、オーラヴ自身もスウェーデンを出自とするのではなく、追放されたデンマーク王族の一人が帰郷することで王位を得たという可能性を指摘した。ただし、その後この解釈に対する反論も公にされており、必ずしも解決したわけではない<sup>(36)</sup>。

もう一つは「ヘゼビュー国家」による支配領域の範囲である。支配家門の関係者を記念する碑文が建てられていることから、ヘゼビューが少なくとも統治拠点の一つであったことは推測できるが、その力の及んだ範囲がユラン半島南部のみに留まるのかそれともユラン半島全体を含むより広い地域まで及んでいたのか、判断は分かれる。本節はこの複雑な二つの問題に対する満足のいく解答を用意するわけではないが、第二点についてはやや踏み込んだ解釈を与える。

当該「国家」に関連する歴史事象としておそらく確実と考えられるのは、ドイツ王ハインリヒ一世に対するグヌーパの敗北である。複数の歴史叙述家が伝えるこの事件は934年のことであり、比較

的に近い時代にその事実を書き記したヴィドキントに拠れば、グヌーパは勝者ハインリヒに対する貢納の義務と洗礼を受け入れている<sup>(37)</sup>。なお、グヌーパ自身に関する情報はこれ以上入手することができないが、碑文の文言から彼の息子であるシグトリュグが「王」の称号を帯びることになったことは確認できる<sup>(38)</sup>。つまり「ヘゼビュー国家」はグヌーパ以降も継続しており、グヌーパ在位時に結ばれたドイツとの関係もまた継続していた可能性も考慮に入れておかなければならない。

しかしながら私たちはここでアダムの伝えるある情報に目を向ける必要がある。それは『事績録』第1書59節にある、ハンブルク＝ブレーメン大司教ウンニによるデンマーク布教とゴームへの接見という記録である<sup>(39)</sup>。918年に大司教となったウンニは、ゴームの反キリスト教的な態度に阻まれて結局デンマークへの布教には失敗し<sup>(40)</sup>、その後スウェーデンにあるメーラレン湖上のビルカでその生を終えているが、没年は936年と考えられる<sup>(41)</sup>。したがって、ウンニがゴームのもとを訪れたのは918年から936年の間ということになるが、934年の時点では「ヘゼビュー国家」のグヌーパが存命であったことはすでに指摘した。そうだとするならば、934年から936年の間にグヌーパから王位を継承したシグトリュグがまもなくデンマーク王としての地位を失い、それを承けてゴームが台頭したとする編年を採用する必要があり、ウンニによるゴームの訪問は934年から936年の間となる。

10世紀前半のデンマークの政治状況は、その前後の時代に比べきわめて曖昧な史料証言しか得られない。ほぼ唯一の手がかりであるアダム自身も、情報提供者であるスヴェン・エストリズセンからある程度の具体的なデンマーク王の系譜に関わる情報を引き出した上で、この時期をさして「一連の多くの王たち、つまりデーン人に対する専制君主たちが、幾人かが同時に統治をしていたのか、それともある者から次の者へと短期間で交代していたのか、はっきりとしない」と述べている<sup>(42)</sup>。この文言は文字通りに受け取るならば当時の政治状況を再現することがいかに困難であるか、自らの父祖を語るスヴェンに伝承する記憶がいかに曖昧であるかの証左である。それゆえ、アダムがハンブルク＝ブレーメン大司教座の利害に左右され

るという『事績録』の孕むイデオロギー性、そして『事績録』に記録される各事実間にときおりみられる矛盾とも相俟って、当該時期のアダムの記述に全面的に信頼を置くことに距離を取るべきだとする歴史家の指摘もあることを述べておかなければならない<sup>(43)</sup>。

しかしながら、こうした見解を承知の上で私たちがここで注目したいのは、アダム自身が複数の「王」が同時に支配していた可能性を排除していないという事実である。そのような可能性をドイツ人であるアダムが観念していたということは、かつてスカンディナヴィア世界では複数の「王」が同時に支配する時期もあったという情報を入手していたからだと判断しうる。事実9世紀末のデン人世界は必ずしも統一されていたわけではないことは前述したとおりである。もちろんそうであるからと言ってゴームとグヌーパがそれぞれデンマーク内の別の地域を統べる「王」として並立していたという決定的証拠となるわけではないが、後述するように当該時期のデンマークは両家門だけではなくもっと多くの有力豪族が各地に割拠していた。地域有力者として他の豪族と角逐や同盟を繰り返していたと考えられる彼らは、たとえ「王」という称号を身に纏うことがなかったとしても特定地域の中では実質的支配者でありえた。ヴィドキントが認識していた「デン人の王」はグヌーパであったかもしれないが、ユラン半島の奥にはゴーム家門を含めてオーラヴ家門に匹敵すると思われる複数の豪族が犇めいていた。そのような状況にあつて、オーラヴ家門が全ての豪族に対する上級支配者として実質的に「デン人の王」として振る舞っていたかどうかという点に関しては留保せねばならない。

以上の考察から判断できることは、930年代オーラヴ家門とゴーム家門はそれぞれ地域の有力者として並存していた可能性が高いということである<sup>(44)</sup>。それではなぜオーラヴ家門はデンマーク史上から消滅することになったのか。それを直接証言しうる史料は存在しないが、ここで一つ注目したいのは両家門にとってのザクセンとの距離である。勃興しつつあったオットー朝と間断なく対峙していたオーラヴ家門に対し、ユラン半島の中央部に位置していたゴーム家門は少なくともド

イツ諸勢力に対しては相対的に低い接触ですんだはずである。両家門の命運を分かつにあたって、ハインリヒ一世のグヌーパに対する勝利は決定的であったのではないだろうか。

## (2) ゴームの出自

さて、前述したように936年にはすでに交渉対象者として外部から認識される地位を得ていたゴームであるが、彼の出自についても解釈上の困難が伴う。『事績録』第1書52章には、「彼（シグトリュグ）が僅かの間（デンマークを）支配したのち、ノルマン人の国からやってきたスヴェンの息子ハルデゴンが彼から王国を奪った」とあるが<sup>(45)</sup>、従来の研究ではここで言及されているハルデゴンなる人物がゴームの誤記であると言われてきた<sup>(46)</sup>。仮にそうだとするならば、ゴーム＝ハルデゴンは「ノルマン人の国」からやってきたスヴェンの息子であり、以前よりデンマークに権力の基盤を培ってきた豪族家門ではないということになる。そしてまた、「ヘゼビュー国家」のオーラヴ家門の出自と同様の問題がここで生じることになる。

つまり「ノルマン人の国からやってきた」という表現は、必ずしもここで言うハルデゴンが「ノルマン人の国」を出自とするということの意味しない。選択肢はやはり二つある。一つはデンマークとは全く関係のない異邦人であるという可能性であり、もう一つは本来デンマーク出自の有力者が何らかの理由で一時的な放浪を経験することになり、好機を得てデンマークに帰還した可能性である。ここでいう「ノルマン人の国」という表現がノルウェーであるのかノルマンディであるのか今確定することはできないが、10世紀前半のこの時代はいずれの地域にとっても政治および社会上の変動期であったことは想起されてもよい。つまり、ノルウェーはハーラル美髪王によるノルウェー全土への権力伸張期であり<sup>(47)</sup>、ノルマンディはその後公領となる領邦の建設期であった<sup>(48)</sup>。

くわえて、イエリング遺構そのものにも注意を向ける必要がある。S・ヴァスの調査によって明らかとなったように、イエリングは確かにローマ期より続く有力者の定住地であった<sup>(49)</sup>。しかしながらイエリングは、デンマーク各地に散在する

有力者拠点と比較して、特に突出した規模を誇っているわけではない<sup>(50)</sup>。そしてまた、ゴーム家門以前のデンマークを支配する立場にあった人物がユラン半島中央部に位置するこの地を拠点にしたという確証を得ることはできない<sup>(51)</sup>。前節で述べたようにオーラヴ朝はヘゼビューを拠点としていたし、九世紀以来当地がデンマーク最大の交易拠点であったことは間違いない<sup>(52)</sup>。地域を統べる王権にとっての重要性という点で言えば、少なくとも当該時期においてはヘゼビューのほうが上位にあると判断せざるを得ない。

アダムによる証言箇所にとどの程度の信頼を置くにせよ、イエリング王朝の出現は突然であり、その過程は多くの謎に包まれている。しかしながらカロリング期以来、ヴァイキング活動を含め有力者を含めたスカンディナヴィア人の環北海圏の往来は盛んであったという背景を想定するならば、「ノルマン人の国」というのがいずれの地域であれ、ゴームが異郷より来訪したという伝承を拒絶することはできない<sup>(53)</sup>。

### (3) チューラとの結婚

イエリング碑文に記されるように、ゴームの妻はチューラである。王というゴームの社会的地位を考えた場合妻は必ずしも一人であるとは限らないが、史料からは彼女以外の婚姻相手を確認することはできない。本節ではチューラの出自と結婚の時期について考察する。

チューラの出自について明言する史料は存在しない<sup>(54)</sup>。しかしながら前述したソーヤー夫妻の研究で論じられるように、彼女が「デーン人の辺境」つまりフン島とシェラン島の境をはしる海峡以東に拠点を持つ有力者の娘であった可能性は高い。その論証過程をここで繰り返すことはしないが、ゴームがそのような地位にあった彼女との結婚を希求する理由は十分にある。

一つは政治上の盟友の確保である。本章第1節で論じたように、ゴームは必ずしもユラン半島においてすら独占的権力を保持しうる立場にはなかった。10世紀初頭の段階で史料上に自己の存在を訴えかけているのはオーラヴ家門であり、ルーン碑文による証言や発掘調査からはデンマーク全土に有力豪族が割拠していたことを確認でき

る<sup>(55)</sup>。そのような状態にあったデンマークにおいて自らの権力基盤を安定させるために必要な手段は、利害の一致する別の有力者との連携であり、それは結婚という手段によって固められる<sup>(56)</sup>。ゴームがデンマーク外部世界からやってきた人物であれば、こうした結婚は権力基盤の形成を急ぐ必要のある彼にとって不可欠と言ってもよい政治的行為となったはずである。

二つ目は対外勢力に対する権力の誇示である。先に述べたようにグヌーパはハインリヒ1世に敗北し貢納の義務を負っていた<sup>(57)</sup>。ユラン半島の奥に座す別家門のゴーム自身がこの義務を継続していた可能性は低いと考えられるが、ウンニが宮廷を訪れていることからドイツへデンマークの動勢が伝えられていたと推測することは可能であろう。この時期にウンニ以外の人物がデンマーク内で活動をしていたとする事実は史料から確認することはできないが、交易品や貨幣の分布状況から商人レヴェルでの情報ネットワークは確実に存在したことが伺える<sup>(58)</sup>。ゴームがチューラと結婚することによりデンマーク内での地歩を固めたという情報は、北方世界への進出を計画していたオットー朝ドイツに対して一種の牽制となったと考えることができる。

さて、もう一つは経済上の利得である。チューラを輩出する家門がデンマーク東部において域内平和を維持しうる存在であったとするならば、その家門との連合は北海からバルト海へと抜ける小ベルト、大ベルト、エーアソンの三海峡の各航路を通航する際の安全性を高める結果へと繋がる<sup>(59)</sup>。それはスカンディナヴィア域内間及び北海世界とバルト海世界間の交易の活性化を促す要因ともなる<sup>(60)</sup>。加えて私たちは『事績録』第4書1節の次の記述にも注意を払わなければならない。

ゲルマニアの全土は深い森で覆われているが、ユトランドのみが他の地域よりも荒涼としており、地上にあっては実りの貧しさのために、海上にあっては海賊の跋扈のために人が寄りつかない。ほとんどどこであっても耕地は見いだされず、人の居住にとって良い条件をそなえているわけではない<sup>(61)</sup>。

以上はユラン半島の状況を述べた部分であるが、これとは対照的にフン島の「周囲を取り巻く小さな島々はいずれも収穫に恵まれ」<sup>(62)</sup>、シェラン島は「穀物の実りが豊かなことで広く知られ」<sup>(63)</sup>、スコーネもやはり「穀物が豊か」であったと伝えられている<sup>(64)</sup>。アダムの情報は11世紀半ばという後世のものであり、彼自身の筆致はやや誇張気味である点は考慮されなければならないが、ここで記録された西部デンマークと東部デンマークつまり10世紀前半における「デーン人の辺境」のもつ農業構造の差異はある程度それ以前の時代にも反映されていると見てよい<sup>(65)</sup>。

それではゴームにとって以上のような効果を生み出すと予想されるチューラとの結婚はいつ執り行われたのであろうか。史料中には明言されていないので、息子ハーラルの年齢から逆算するのが唯一の推測手法であろう。実はハーラルの確実な年齢を決定する要素も見いだせないでいるのであるが、彼自身960年以降の数年間にキリスト教への改宗を経験し<sup>(66)</sup>、後述するように958年のゴームの死を承けてイエリングに墳墓を建立したのがその少し前であると考えられている<sup>(67)</sup>。つまり960年にはすでに父のために墳墓を築くだけの権力を手にしていたと考えるべきで、少なくともその時点で10代後半から20歳前後であったと推測できる。そうであるとするならばハーラルの生年は930年代後半から940年代と計算可能であり、ゴームとチューラの結婚はそれ以前となる。それはグヌーパがハインリヒ1世に敗北し、ウンニが宮廷に立ち寄った前後の時期である。

#### (4) ゴームの支配領域

前節で検討したように、ゴームはチューラとの結婚によって次代のハーラル青歯王の治世を準備する強固な権力基盤を用意したと考えられる。それではゴームがその支配権を行使する領域はどの範囲にまで及んでいたのであろうか。

チューラとの結婚以前のゴームの支配領域について直接語る資料を私たちはもちあわせていない。ただし、ユラン半島南部にオーラヴ家門が盤踞していたこと、そしてゴーム自身が必ずしも以前からデンマーク内に基盤を培っていないという可能

性を考えると、治世当初おそらくその範囲はイエリング周辺のみに限定されていたと考えられる。しかしながらオーラヴ家門の没落とチューラとの結婚はこの範囲を確実に拡大したと考えられる。その結果としてゴームは、必ずしもユラン半島南部及びデンマーク東部を直接支配下に治めたわけではなかったかもしれないが、一定程度の影響力を行使することは可能になったと考えられる。

ここで私たちはある史料に注目したい。それは948年に教皇アガピトゥス2世を司宰者としてオットー1世治世下のインゲルハイムで開催された教会会議の決議文である<sup>(68)</sup>。その前文には当該教会会議に出席した司教の名が列挙されているが、その中にリーベ司教、スレスヴィ（ヘゼビュー）司教、オーフス司教の名を確認することができる。ただし、ゴームはキリスト教を拒絶していたので、彼の治世下において実際に司教座が建設されそれが機能していたかどうかは疑わしく、おそらく決議録前文中に記される三者は現地で祭式を執り行うことのない名義のみの司教であった可能性は高い<sup>(69)</sup>。

ここで注意を喚起したいのは、このユラン半島に散在している三都市それぞれからアクセスの良い位置にイエリングがあるという地政学的な事実である。オットー朝下ドイツで司教座として認識されていたこの三都市は、いずれも司教座である前にヴァイキング時代当初から交易拠点としての役割を果たしていた<sup>(70)</sup>。そしてもう一点、フン島以東の島嶼部にはまだ司教座が設置されていないという事実も見落とすべきではない。965年に発給されたオットー1世による国王証書にはやはり三つの司教座名しか記されておらず<sup>(71)</sup>、デンマーク第四の司教区となるオーデンセがはじめて確認されるのは988年のことである<sup>(72)</sup>。つまりゴーム治世期に外部世界から司教座予定地として認識されるほど顕著な地位を占めていたデンマーク内の都市はリーベ、オーフス、スレスヴィの三つであり、おそらくはこの三都市を結んだ領域周辺がゴームの影響力が相対的に強い領域であった可能性は考慮してもよい。そしてチューラとの結婚によって結びつきが強固となったはずである島嶼部は、いまなおユラン半島に比べれば影響力の及ばない地域であったと考えられる。ロスキレと

ルンドという後の王国中心地をひかえた島嶼部からスカンディナヴィア半島南端部にゴーム家門の力が確実に及ぶのは、ハーラル青歯王治世期からスヴェンヌ王治世期へと移行する10世紀の最末期においてである<sup>(73)</sup>。

#### (5) ゴームの死とハーラルの登位

最後にゴームの死について考えておかなければならない。

イエリング教会から発掘された遺骨はゴームの可能性が高いと考えられているが、その没年は彼を最初に葬った北墳内の墓室の支え木の伐採年代から判断して、958年から959年の冬であるとされている<sup>(74)</sup>。遺骨の調査から推定される人物の身長は173センチメートル、年齢幅は30代から50代の間であり、死因は必ずしも特定されない<sup>(75)</sup>。

ここで私たちはイエリング遺構に立ち戻らねばならない。現在残る遺構は、南北二つの墳丘、二つのルーン碑文、墳丘に挟まれて建つ石造教会によって構成されている。しかしながら第1章で述べたように、いま私たちが接することのできるこの遺構構成はゴーム期の姿を伝えるものではなく、息子ハーラルによる創生であり、それまでのデンマークの歩みを隠蔽する「歴史の改竄」でもある。そのため、ゴーム治世期の手がかりをそこから引き出すためには、ゴーム死亡時のイエリングを再構成しなければならない。

それではゴームが死去した958年段階の遺構はどのような構成をとっていたのであろうか。彼がウンニによる布教活動を拒絶したことから判断できるように、イエリングの周辺がキリスト教社会であるとするのは困難であり、したがって中央に位置する教会はまだ建設されていない<sup>(76)</sup>。同様に、キリスト教への改宗を宣言する大碑文も建立されてはいない。そして南墳もまだ盛り土されていたわけではない。ゴームの死亡時にイエリングを構成していたのは青銅器時代に築かれたと考えられる北墳、南墳の下に埋もれてしまった船体型に配置された石柱列、そして小碑文のみであった<sup>(77)</sup>。南方のキリスト教世界からの圧迫と接触を経験してはいたものの、ゴームの時代のデンマークはなお非キリスト教世界であり、父の死直後のハーラル青歯王もまた在来宗教を奉じていた。

ゴーム死後から息子ハーラルでのキリスト教改宗まで僅か数年である。そして彼の改宗直後に、イエリングは異教の都からキリスト教君主の記念碑へと突如「改竄」されたのである。しかし、なぜチューラの遺体が見つからないのか、なぜ誰も埋葬されていない南墳をわざわざゴームの死後につくったのか、なぜ二つの墳丘の間に教会と二つの碑文を設置したのかなど、イエリングをめぐる未解決の問題は多い<sup>(78)</sup>。

#### 結論にかえて：いくつかの方向性

以上ソーヤー夫妻の研究を出発点として、ゴーム治世をめぐる問題点を残された叙述史料を主たる手がかりとして都合五点検討してきた。いずれの点も旧説に対しいくつかの所見を付け加えることができたが、ほとんどが直接証言ではなく状況証拠に依拠せねばならず、ゴームの足跡はなお追跡困難であることは認めなければならない。本章では、ゴームの治世を検討するにあたっていくつか残されている課題を列挙し、今後どのようなアプローチが有効であるのかを考えてみたい。

##### (1) オットー朝との対峙

最初に挙げるべきはオットー朝との関係である。選挙の結果911年にドイツ王として即位したハインリヒ1世以来、ドイツ王権の重心はザクセンを中心とするドイツ北部に移動した<sup>(79)</sup>。それは隣接する非キリスト教諸地域との接触が増え、その結果としてデンマークを含めた周縁諸集団は政治、経済、文化いずれの側面においても従来とは異なる対応を迫られることになる。デンマークに関しては、前述したグヌーパのハインリヒ1世に対する敗北が一つの転機となる。

前述したようにゴーム家門はオーラヴ家門とは無関係であり、おそらくゴームはグヌーパが課された貢納義務を継続していない。そして史料からは当面ゴームとドイツとの境域問題に関する情報を得ることはできない。しかしながらオットー朝の勃興は従来バルト海沿岸部で機能していた権力構造にも影響を与えたと考えられる。ゴームの息子ハーラル青歯王によるオボドリート族長の娘との婚姻もこうした文脈の中で考えるべき出来事である。



あり<sup>(80)</sup>、10世紀後半には他のスカンディナヴィア諸王権を加えてより複雑な域内政治が展開されることになる<sup>(81)</sup>。その枠組みの源はゴーム治世期と重なるはずであり、スラヴ諸勢力も含めたバルト海沿岸部の政治史は地域史レヴェルの再考を必要としている<sup>(82)</sup>。

### (2) キリスト教との接触

オットー朝との対峙に加えて、キリスト教との接触も重要な意味を持っている。しかしながらこの接触は単なる精神生活上の変革という問題にのみ還元されるわけではなく、政治史上そして政治文化面におけるデンマークの転換にも少なからぬ寄与をしたはずである。前述したように、スカンディナヴィア世界のキリスト教化はハンプルク＝ブレーメン大司教座の活動と分かち難く結びついている。加えてその背後にドイツ王権そして教皇庁を加えた重層的な利害のネットワークを想定する必要がある<sup>(83)</sup>。

ウンニによるゴームとの接触、インゲルハイム教会会議における三司教の任命、ハーラル青歯王によるイエリング遺構の突然の「キリスト教化」と連続する過程は、キリスト教王としてのハーラル登位以前のゴーム治世期にデンマークが大きな変動を経験していたことを示唆している。加えて、キリスト教先進地であるイングランドと持続的な文化接触を保っていたノルウェー<sup>(84)</sup>、低地地方に開かれたリーベを中心に据えるユラン半島西岸部<sup>(85)</sup>、ノルマンディを含む西ヨーロッパ世界でキリスト教に改宗し故地へ帰還するスカンディナヴィア人という経路も含めた再検討の必要を指摘しておきたい。

### (3) 豪族の割拠

さて、この時期の政治史を考えるにあたってとりわけ強調しておく必要があるのは、在地有力者である豪族の存在である。10世紀前半のデンマークには、一時的ながらオーラヴ家門とゴーム家門という複数の王家が並存していた可能性も残されていることはすでに確認したが、たとえ「王」の称号は少なくとも王権と匹敵する権力を手中にしていた在地豪族が割拠していたこともまた確実である。本稿の既出人物と関わりある範囲で言えば、

オーラヴの妻アストリーズの出身家門、チューラの出身家門、ソーヤー論文でゴーム家門のライヴァルと指摘されたチュエの所属するラヴン家門はその代表的な例であるが、とりわけルーン碑文の証言からはさらに多くの豪族の存在が確認される<sup>(86)</sup>。

こうした豪族の割拠により王を名乗る者たちが独占的にデンマーク内で権力を独占することが困難であったことは想定されてもよい。とりわけ、デンマークに基盤を持っていた可能性の低いゴームにとって、彼らとの連携はその支配権力の安定にとって不可欠であった。私たちのもとに伝承する叙述史料では追跡することの難しいこうした豪族の分布図と動向を、少なくとも碑文で確認される人物と発掘された彼らの居住地の網羅的検討を試みることで復元することは、その後のデンマーク王権の展開過程を考えるに際して不可欠の作業であることをここで確認しておきたい。

ゴームの死後、デンマーク王権はハーラル青歯王、スヴェン叉髭王、クヌーズ大王というきわめて活動的な人物を連続して玉座に頂くことになる。「北海帝国」と呼称されるクヌーズ大王による11世紀初頭の環北海圏支配によって当該王権はその絶頂期を迎えることとなるが、それは必ずしも一個人の英雄的資質によるものではない。キリスト教政治圏における国家間関係の構造と支配領域内部における有力者の動向を了解した上で、状況に応じた政策をもって対応した結果によるところが大きいと私は考える。その源泉はクヌーズの曾祖父に当たるゴーム王の時代にあり、その後のデンマーク史のみならず紀元千年前後から叙任権闘争期以前の北ヨーロッパ史を考えるに際して一つの焦点となるのである<sup>(87)</sup>。

### English summary

In the Pursuit of Gorm's Footmarks: Gorm the Old in Historiography and Written Sources  
Minoru OZAWA

This article consists of three chapters of

discussions about Gorm the Old, the first king of the Jelling dynasty in the earlier half of the 10th century. The first chapter deals with some problems which the historiography of his image has produced since the beginning of the 20th century, depending on B. Sawyer and P. Sawyer's article published in 2003. The second discusses five points of his reign, (1) successional problem from the "Hedebyrige" to Gorm, (2) political group Gorm originally belonged to, (3) his marriage with Thyra, (4) limits of the territory he reigned, (5) his burial at Jelling by his son Harald Bluetooth. The last gives three lines of new approach to deeper study of the age of Gorm, i.e. interaction with Ottonian Germany, increasing influence of Christianity, and relations of the king with local elites, which all are characteristics of a changing Denmark at the last stage of the Viking age.

- (1) I. Skovgaard-Petersen, "Gorm", B. Cedergreen red., *Dansk biografisk leksikon*, 3. udg., 16 bd., København, 1979-84, bd. 5, s. 244-45.
- (2) この表現は13世紀の歴史叙述家サクソ・グラマティクスによる。谷口幸男訳『デンマーク人の事績』(東海大学出版会 1993)第9の書11節、421頁。
- (3) 本稿で利用するルーン碑文銘刻の翻刻と解釈は、現在のほとんどの研究者がそうであるように、刊本の編者であるヤコブセンとモルトケによる註釈とデンマーク語訳を参考としている。L. Jacobsen & E. Moltke red., *Danmarks runeinskrifter. Text*, København, 1942(以下 DR); DR 41, col. 78. ; kurmR kunukR? k(ar)þi kubl þusi a(ft) þurui kunu sina tanmarkaR but. (訳)「王ゴームは、デンマークの誉れであるその妻チューレを記念してこの碑を建立した。」; DR 42, col. 79 ; haraltr kunukR þaþ kaurua kubl þausi aft kurmfapursin aukaft þaurui muþur sina

sa haraltrias saR uan tanmaurk ala auk nuruiak auk tani (karþi) kristna. (訳)「王ハーラルは、その父ゴームと母チューレを記念してこの碑を建てるように命じた。これなるハーラルは、全デンマーク、そしてノルウェーを手中にし、デーン人をキリスト教徒とした。」

- (4) カロリング帝国と「国民国家」生成期に挟まれ、外部勢力の侵入期にあたっていたために等閑視されていた当該時期のヨーロッパを「長い10世紀」という枠を与えて論じることの重要性を説いたのは、T. Reuter, "Introduction: reading the tenth century", Id. ed., *The New Cambridge Medieval History III, c. 900-c. 1024*, Cambridge, 1999, p. 1-24.
- (5) 当該時期の歴史的研究の出発点であるラウリッツ・ヴェイブルのモノグラフは、L. Weibull, *Kritiska Undersökningar i Nordens historia omkring år 1000*, Lund, 1911, rep. in Id., *Nordens Historia. Forskningar och undersökningar I: Forntid och vikingatid*, Stockholm, 1948, s. 245-360, esp. 249-57.; その後の研究と叙述として、E. Arup, *Danmarks historie I: Land og Folk til 1282*, København, 1925, s. 114-15.; V. La Cour, "Kong Gorm og Dronning Tyre", *Historisk Tidsskrift* 9r. 5(1926-27), s. 189-252.; T. Ramskou, *Normannertiden 600-1060 (Danmarks historie 2)*, København, 1963, s. 226-34.; A. E. Christensen, *Vikingetidens Danmark paa oldhistorisk baggrund*, København, 1977, s. 223-41. ; I. Skovgaard-Petersen, "Oldtid og vikingetid", Id. et alii red., *Danmarks historie I: Tiden indtil 1340*, København, 1977, s. 161-70.
- (6) このイメージは、13世紀初頭にアイスランドで編纂された『ファグルスキナ』の中に描かれるゴーム像である。L. Weibull, "Godfreds och Tyre Danebods Danevirke", *Historisk tidskrift för Skåneland* 4 (1913), rep. in Id., *Nordens Historia*, s. 221.
- (7) しかしこの二つの類型の歴史史料もそれぞれに問題を抱えており、歴史学における積極的な

- 利用はまだはじまったばかりである。近年の一つの試みとして、J. Jesch, *Ships and Men in the Late Viking Age: The Vocabulary of Runic Inscriptions and Skaldic Verse*, Woodbridge, 2001.
- (8) ヴァイキング研究においてスカンディナヴィア外の史料を利用する際の問題点等に関して、P. H. Sawyer, *The Age of the Vikings*, 2 ed., London, 1971, p. 12-47.
- (9) 本稿で初期中世スカンディナヴィア世界をめぐる史料状況とその問題点を取り上げる余裕はない。その一端に触れたものとして、小澤実「エーリク勝利王と紀元千年直前のバルト海世界」『史学雑誌』113-7 (2004)、第1章。
- (10) ハーラル青歯王に関する近年の成果として、I. Skovgaard-Petersen, “Harald Blåtand”, *Dansk biografisk leksikon*, bd. 6, s. 13-14.; E. Albrechtsen, “Harald Blåtand og Danmark”, C. Due-Nielsen et alii red., *Struktur og funktion. Festschrift til Erling Ladewig Petersen*, Odense, 1994, s. 17-26.; N. Lund, *Harald Blåtands død*, Roskilde, 1998.; Id., “Harald Bluetooth -a saint very nearly made by Adam of Bremen, with discussion”, J. Jesch ed., *The Scandinavians from the Vendel Period to the Tenth Century: An Ethnographic Perspective*, Woodbridge, 2002, p. 303-20.
- (11) 考古学上の成果に関する調査報告や仮説提示は数多くあるが、ここでは歴史学と考古学の橋渡し役として健筆を振るウロエスグールの論考をあげるにとどめたい。E. Roesdahl, “The Danish geometrical Viking fortresses and their context”, *Anglo-Norman Studies* 9 (1986), p. 209-26.; Id., “Harald Blauzahn -ein dänischer Wikingerkönig aus archäologischer Sicht”, J. Hennig hrsg., *Europa im 10. Jahrhundert. Archäologie einer Aufbruchszeit*, Mainz, 2002, S. 95-108.; なお、N・ルンは、これらの円形要塞をハーラル青歯王によるデンマーク統一という文脈の中で理解すべきであると主張する。N. Lund, “Scandinavia, c.700-1066”, R. Mckitterick ed., *The New Cambridge Medieval History II, c.700-c.900*, Cambridge, 1995, p. 202-27, esp. 216.
- (12) 本稿で利用する校訂版は、B. Schmeidler hrsg., *Adam von Bremen, Hamburgische Kirchengeschichte (MGH SRG)*, 3. Aufl., Hannover, 1917 (以下Adam).; 『事績録』をめぐる研究も枚挙にいとまがない。近年の研究傾向を簡単ではあるが概観したのは、T. Reuter, Introduction to the 2002 edition, F. J. Tschan tr. with an introduction & notes, *History of the Archbishops of Hamburg-Bremen (Records of Western Civilisation)*, New York, 2002, xi-xxi.; アダム の記述の信頼度をめぐる問題点は以前より指摘されていたが、P. H. Sawyer, “Swein Forkbeard and the historians”, I. Wood & G. Loud eds., *Church and Chronicle in the Middle Ages: Essays presented to John Taylor*, London, 1991, p. 27-40.; B. Sawyer & P. H. Sawyer, *Die Welt der Wikinger (Die Deutschen und das europäische Mittelalter)*, Berlin, 2002, S. 351-56.; 『事績録』の執筆年より五百年を遡るが、叙述史料が何を語ったかというよりも何を語らなかったかに注目した研究の好例として、佐藤彰一『歴史書を読む 『歴史十書』のテキスト科学』(山川出版社 2004)、「第4章 沈黙のテキスト」112-43頁。
- (13) ハンブルク＝ブレーメン大司教座の成立の経緯とその目的に関して、W. Seegrün, “Hamburg-Bremen”, R.-H. Bautier et alii hrsg., *Lexikon des Mittelalters*, 9 Bd., Köln-München, 1977-98, Bd. 4, col. 1885-89.
- (14) ハンブルク＝ブレーメン大司教座の参事会員アダムは、北欧内の情報の多くをデンマーク王スヴェン・エストリズセンから入手している。スヴェンに関する基礎的文献としては今なお、E. Arup, “Kong Svend 2.s Biografi”, *Scandia* 4 (1931), s. 55-101, rep. in Id., *Udvalgte Afhandlinger og anmeldelser II, 1919-47*, København, 1977, s. 297-343.
- (15) 19世紀以来の数次にわたるイエリングの発掘調査を概観しているのは、K. J. Krogh, “The royal Viking-age monuments in the light

- of recent archaeological excavations: a preliminary report”, *Acta Archaeologica* 53 (1982), p. 183-216. ; Id., *Gåden om Kong Gorms Grav. Historien om Nordhøjen i Jelling (Vikingekongernes monumenter i Jelling I)*, København, 1993.
- (16) E. Roesdahl, “Cultural change -religious monuments in Denmark c. AD 950-1100”, M. Müller-Wille hrsg., *Rom und Byzanz im Norden. Mission und Glaubenswechsel im Ostseeraum während des 8. -14. Jahrhunderts*, Bd 1, Mainz, 1997, S. 229-48.
- (17) P. H. Sawyer, *Da Danmark blev Danmark fra c. år 700 til ca. 1050 (Gyldendal og Politikens Danmarks historie 3)*, København, 1988, s. 213-31. ; Sawyer & Sawyer, *op. cit.*, S. 373-85.
- (18) B. Sawyer, & P. H. Sawyer, “A Gormless history? The Jelling dynasty revisited”, *Runica -Germanica -Mediaevalia (RGA-E 37)*, Berlin -New York, 2003, S. 689-706. 文献史料と考古学資料をP・ソーヤーが、碑文史料をB・ソーヤーが担当した共著であるが、全編を通して妻のビルギットの解釈の占める割合が圧倒的に多いように思われる。
- (19) チューラについては、I. Skovgaard-Petersen, “Tyre”, *Dansk biografisk leksikon*, bd. 15, s. 114-15.
- (20) こうした研究は枚挙にいとまがないが包括的な研究として、P. Stafford, *Queens, Concubines and Dowagers, the King's Wife in the Early Middle Ages*, Athens, Ga., 1983. ; 近年のモノグラフとして、Id., *Queen Emma & Queen Edith: Queenship and Women's Power in Eleventh-Century England*, Oxford, 1997. ; O. Engels, “Theophanu - die westliche Kaiserin aus dem Osten”, Id. & P. Schreiner hrsg., *Die Begegnung des Westens mit dem Osten: Kongreßakten des 4. Symposions des Mediävistenverbandes in Köln 1991 aus Anlaß des 1000. Todesjahres des Kaiserin Theophanu*, Sigmaringen, 1993, S. 13-36.
- (21) B・ソーヤーをはじめとして、ヴァイキング時代の女性の公的世界における役割を論じた研究も増加しつつある。例えば、B. Sawyer, “Women as bridge-builders: the role of women in Viking-Age Scandinavia”, I. Wood & N. Lund eds., *People and Places in Northern Europe 500-1600: Essays in honour of Peter Hayes Sawyer*, Woodbridge, 1991, p. 211-24.
- (22) DR 41, col. 78.
- (23) こうした解釈は、890年頃アルフレッド王の宮廷においてラテン語から古英語へ翻訳されたオロシウスによる『異教徒に反駁する七書』に添付された、北欧地理に関する記述の分析に基づいている。刊本は、N. Lund ed., *Two Voyagers at the Court of King Alfred: The Ventures of Ohthere and Wulfstan together with the Description of Northern Europe from the Old English Orosius*, York, 1984, p. 16-25. ; 新解釈を代表する文献として、N. Lund, “Denmark”, ‘tanmarkar but’ and ‘tanmaurk ala”, I. Wood & N. Lund eds., *op. cit.*, p. 161-69. ; C. Müller-Boysen, “《on thæt bæcbord Denamearc》: Politische Geographie von Bord eines Wikingerschiffes aus betrachtet”, W. Paravicini hrsg., *Mare Balticum: Beiträge zur Geschichte des Ostseeraum in Mittelalter und Neuzeit. Festschrift zum 65. Geburtstag von Erich Hoffmann*, Sigmaringen, 1992, S. 21-37.
- (24) オロシウス古英語訳の理解にしたがって、ユラン半島側を南デンマーク、島嶼部を北デンマークとする研究者も多いが、本稿では西部及び東部という呼称を用いる。
- (25) 夫妻と緊密な知的交流を持つ研究者の手になる以下の文献でも、同様の道筋を想定している。Lund, Scandinavia, p. 217,
- (26) Sawyer & Sawyer, *op. cit.*, p. 700-01.
- (27) DR 26, col. 50-53. ; rhafrnukatufr hiau runaR þasiaft þurui trutnik sina. (訳)「ラヴンの子孫チュエは、その妃チューラを記念してこのルーンを刻んだ。」; DR 29, col. 54-55. ; rafhuka tufr auk futin auk knubli þair þriR kapu

þuruiar hauk. (訳)「ラヴンの子孫チュエ、フンゼンそしてグニユブレは、チューラの塚を作った。」; *DR* 34, col. 59.; ..fnukatufikapihaukþxx... (訳)「(ラヴンの) 子孫チュエは、(チューラの) 塚を作った。」

(28) Sawyer & Sawyer, *op. cit.*, p. 697-99.

(29) B・ソーヤーの議論は、B. Sawyer, *Property and Inheritance in Viking Scandinavia: The Runic Evidence*, Alingsås, 1988.; Id., *The Viking-Age Rune-Stones: Custom and Commemoration in Early Medieval Scandinavia*, Oxford, 2000, p. 47-70.; 対象時期は異なるが碑文そのものの社会的役割を考える際に示唆的な研究として、羽賀祥二『史蹟論 19世紀日本における地域社会と歴史意識』(名古屋大学出版会 1998) および、橋本資久「紀元前4世紀アテナイにおける対市民顕彰」『西洋古典学研究』47 (2000)、23-31頁。

(30) Sawyer & Sawyer, *op. cit.*, p. 699.

(31) 「ヘゼビュー国家」をめぐる各説の整理と検討は、杉原航『ポルトウス・レグニ、あるいは中世初期デンマークの都市と社会』(1996年度名古屋大学大学院文学研究科修士論文) 第3章に詳しい。なお出発点として参照されるべきは、L. Jacobsen, *Svenskevældets Fald: Studier til Danmarks Oldhistorie i filologisk og runologisk Lys*, København, 1929.

(32) Adam, I-48, S. 48.; Audivi autem ex ore veracissimi regis Danorum Suein, cum nobis stipulantibus numeraret atavos suos: 'Post cladem', inquit, 'Nortmannicam Heiligonem regnasse comperi, virum populis amabilem propter iusticiam et sanctitatem suam. Successit illi Olaph, qui veniens a Sueonia regnum optinuit Danicum vi et armis, habuitque filios multos, ex quibus Chnub et Gurd regnum optinuerunt post obitum patris'. (訳)「正直この上ないデーン人の王スヴェンが、我々の求めに応じてその父祖を数え上げている時に、私は彼の口から以下のことを聞いた。『ノルマン人の転落後は、その公正さと清らかさのために民から愛されていたヘルギが支配していたと伝え聞いている。彼の跡

を継いだのはオーラヴであるが、彼はSueoniaからやってきて武力でデーン人の王国を手に入れた。彼は多くの子をもうけたが、その中のグヌーパとグルズがその父の死後王国を手に入れた。』; 当時統一されたスウェーデンという国はなく、スヴェア人やヨータ人と呼ばれる集団の政治的なまとまりが割拠していたと考えられるが、その詳細を再構成することは困難である。D. Harrison, *Sveriges historia: Medeltiden*, 2002, Stockholm, s. 55-58.

(33) *DR* 2, col. 10-14.; asfriþr karþi kum bl þaun aft siktriku sun (s)in aui knub. (訳)「アストリーズは、彼女とグヌーパの息子であるシグトリュグを記念してこの記念碑をつくった。」; *DR* 4, col. 14-16.; asfriþr karþi kubl þausi tutiR upinkaurs aft siktriuk kunuk sun sin auk knubu kurmR raist run(aR). (訳)「オディンカルの娘アストリーズは、彼女とグヌーパの息子である王シグトリュグを記念してこの記念碑をつくった、ゴームがルーンを刻んだ。」

(34) たとえば、Ramskou, *op. cit.*, s. 222-25.

(35) N. Lund, "Svenskevældet i Hedeby", *Årbøger for nordisk Oldkyndighed og Historie* 1980 (1982), s. 114-25.

(36) E. Moltke, "Det svenske Hedebyrige og Danmarks samling", *Årbøger for nordisk Oldkyndighed og Historie* 1985 (1986), s. 16-28.

(37) H.-E. Lohmann & P. Hirsch hrsg., *Die Sachsengeschichte des Widukind von Korvei (MGH SGR)*, Hannover, 1935, I-40, S. 57.; Cum autem omnes incircuitu nationes subiecisset, Danos, qui navali latrocinio Fresones incersabant, cum exercitu adiit vicitque, et tributaries faciens, regem eorum nomine Chnubam baptismum percipere fecit. (訳)「さて、彼(ハインリヒ一世)は周囲の全ての民を服属させた後、フリーセン人を海賊行為によって襲撃していたデーン人のもとへ進軍して打ち負かし、グヌーパなる彼らの王に洗礼を受けさせ、彼らを買納民とした。」; 同様の情報はリウトブランド・フォン・クレモナ

によっても伝えられている。J. Becker hrsg., *Antapodosis, Die Werke Liudprands von Cremona (MGH SGR)*, Hannover, 1915, S. I-158.; III-21, S. 82 & III-48, S. 100.; アダムはハインリヒ一世に敗北したデーン人の王をゴームとしているが、オットー朝の事情に通じ、事件と近接した時代に執筆されたヴィドキントの情報がより正確であると考えられる。Adam, I-57, S. 56-57.

(38) DR 4, col. 14-15.

(39) Adam, I-59, S. 57-58. ; Postquam vero confessor Dei pervenit ad Danos, ubi tunc crudelissimum Worm diximus regnasse, illum quidem pro ingenita flectere nequivit saevitia; filium autem regis Haroldum sua dicitur predicatione lucratus. Quem ita fidelem Christo perfecit, ut christianitatem, quam pater eius semper odio habuit, ipse haberi publice permetteret, quamvis nondum baptismi sacramentum percepit. Ordinatis itaque in regno Danorum per singulas ecclesias sacerdotibus sanctus Dei multitudinem credentium commendasse fertur Haroldo. Cuius etiam fultus adiutorio et legato omnes Danorum insulas penetravit, euangelizans verbum Dei gentilibus et fideles, quos invenit illuc captivatos, in Christo confortans. (訳)「前述したように、粗野この上ないゴームの支配していたデーン人のもとに、神の証聖者(ウンニ)は辿り着いたが、そのゴームの野蛮さがはなはだしいために従えることができなかった。しかし王の息子ハーラルはウンニの説教を受け入れたと言われている。そして、ハーラルは、自身が受洗の秘蹟を経験したわけではなかったが、その父が最後まで嫌悪していたキリスト教を自らが受け入れたと公言することによって、キリストに対する信仰を完成させた。このようにしてデーン人の王国では各教会に司祭が叙階され、この神の聖人(ウンニ)はハーラルに多くの信徒を与えることになったと言われている。ハーラルによる助力とその代理人の随伴のおかげもあって、ウンニはデーン人の島をあまねく経巡り、異邦

人に神の言葉を伝え、捕虜として当地で発見された信徒をキリストへと対面させた。」;ただしこの箇所のを事実として受け取ることにはできない。というのも、ゴームの息子ハーラルつまりハーラル青齒王が彼の滞在時にキリスト教へ改宗したことになっているからである。ハーラルが改宗したのは、ウンニの死後20年以上も経過した960年以降のことである。

(40) Adam, I-55, S. 56. ; Apud Danos eo tempore Hardecnudth Vurm regnavit, crudelissimus, inquam, vermis et christianorum populis non mediocriter infestus. Ille christianitatem, quam in Dania fuit, prorsus delere molitus sacerdotes Dei a finibus suis depulit, plurimos quoque ille per tormenta necavit. (訳)「その当時デーン人の間では、ハーデクヌーズ=ゴームが統治していたが、彼は残忍この上なく、地虫のようであり、キリスト教徒を容赦なく脅かしていた。この者はデンマークにすであつたキリスト教を再度消し去ろうとして、神の司祭をその支配領域から追放し、なかには拷問で殺害された者もいた。」

(41) ウンニの生涯に関しては、S. Weinfurter & O. Engels hrsg., *Series episcoporum ecclesiae catholicae occidentalis ab initio usque 1198, V-II: Archiepiscopatus Hammaburgensis sive Bremensis*, Stuttgart, 1984, S. 21.

(42) Adam, I-52, S. 52-53. ; Aliqua vero recitavit nobis clarissimus rex Danorum ita rogantibus: 'Post Olaph', inquit, 'Sueonum principem, qui regnavit in Dania cum filiis suis, ponitur in locum eius Sigerich. Cumque parvo tempore regnasset, eum Hardeggon, filius Suein, veniens a Nortmannia privavit regno'. Tanti autem reges, immo tyranni Danorum, utrum simul aliqui regnaverint, an alter post alterum brevi tempore vixerit, incertum est. (訳)「聡明なるデーン人の王(スヴェン・エストリズセン)は、私のためにいくつかの話を語ってくれたが、それは以下のようなものである。彼が言うには、『息子たちとともにデンマークを支配していたスウェーデンの君主オーラヴののち、シグトリュ

グがその地位を継承した。彼がわずかの間支配したのち、ノルマン人の国からやってきたスヴェンの息子ハルデゴンが彼から王国を奪った。』しかし、一連の多くの王たち、つまりデーン人に対する専制君主たちが、幾人かが同時に統治をしていたのか、それともある者から次の者へと短期間で交代していたのか、はっきりとしない。」

- (43) Sawyer & Sawyer, *Die Welt der Wikinger*, S. 351-56.
- (44) このような立場をとるならば、ウンニがゴームの宮廷に立ち寄った時期も、必ずしも934年以降とする必要はない。918年から936年の間に、この大司教がドイツとの境に身を置くオーラヴ家門を飛び越えてユラン半島のさらに奥まで入り込んでいたとしても良いはずである。
- (45) Adam, I-52, S. 53.
- (46) 例えば、W. Trillmich & R. Buchner hrsg., *Quellen des 9. und 11. Jahrhunderts zur Geschichte der hamburgischen Kirche und des Reiches (Ausgewählte Quellen zur deutschen Geschichte des Mittelalters XI)*, Darmstadt, 1961, I-52, n. 255, S. 224-225.
- (47) 10世紀前半のノルウェー政治史に関してはさしあたり、C. Krag, *Norges historie fram til 1319*, Oslo, 2000, s. 44-55.; アングロサクソン世界とノルウェー王権との連関に注目した近年の研究として、G. Williams, “Hákon Adalsteins fóstri: aspects of Anglo-Saxon kingship in tenth-century Norway”, T. R. Liszka & L. E. M. Walker eds., *The North Sea World in the Middle Ages: Studies in the Cultural History of North-Western Europe*, Dublin, 2001, p. 108-26.
- (48) ノルマンディ公領成立期の政治状況に関しては、D. Bates, *Normandy before 1066*, London, 1982, p. 2-15.; D. C. Douglas, “Rollo of Normandy”, *The English Historical Review* 57 (1942), p. 417-36. ここでダグラスは、ロロの出自をノルウェーの有力豪族メーレのヤール家門と推定している。
- (49) S. Hvaas, “Jelling - Schon in der Wikingerzeit eine tausendjährige Siedlung”, A.

Weese hrsg., *Studien zur Archäologie des Ostseeraums. Von der Eisenzeit zum Mittelalter. Festschrift für Michael Müller-Wille*, Neumünster, 1998, S. 161-76.

- (50) J. Callmer, “Machtzentren des 10. Jahrhunderts und der Zeit um 1000 in Südsandinavien”, J. Hennig hrsg., *op. cit.*, S. 65-79.
- (51) 王権もしくは有力豪族の一つの拠点として注目されるのは、ロスキレ南西部に位置するライアである。T. Christensen, “Lejre beyond legend - the archaeological evidence”, *Journal of Danish Archaeology* 10 (1991), p. 163-85.
- (52) 商業拠点としてのヘゼビューの盛衰に関しては、H. Jankuhn, *Haithabu: Ein Handelsplatz der Wikingerzeit*, 8 Aufl., Neumünster, 1986.; その生成から没落に到るまでの王権との関わりを論じようとしたのは、杉原、同書。
- (53) 時代はやや遡るが、異郷におけるデンマーク王族とフランク王国との関係を論じた興味深い研究として、S. Coupland, “From poachers to gamekeepers: Scandinavian warlords and Carolingian kings”, *Early Medieval Europe* 7 (1998), p. 85-114.
- (54) チューラをイングランド出身と伝えるサクソの情報を受け入れることは難しい。ただし、ソーヤー夫妻は、この情報をもってチューラがゴーム支配領域の外部出身であることの傍証としている。Sawyer & Sawyer, *A Gormless history ?*, p. 696-97.
- (55) この点に関しては、本稿「結論にかえて」の(3)を参照。
- (56) ハーラル青歯王がオボドリート族首長の娘、スヴェン叉髭王がポーランド公の娘、クヌーズ大王がイングランド在地有力者の娘およびノルマンディ公の娘を妻に迎えているという事実も、この時代のデンマーク王権の統治政策を考えるにあたって想起されるべきである。
- (57) Widukind, I-40, S. 57.
- (58) 同時代のイングランドや大陸側史料に記録される、時として不確かなスカンディナヴィア世界の情報は、おそらくこのようなネットワークを通じて編年誌家や歴史叙述家のもとに届いた

と考えられる。この時代のスカンディナヴィア世界と周辺地域の商業ネットワークを考えるにあたって、P. Johaneke, “Marchants, markets and towns”, Reuter ed., *op. cit.*, p. 64-94.; H. Steuer, “Der Handel der Wikingerzeit zwischen Nord und Westeuropa aufgrund archäologischer Zeigniss”, K. Düwel et alii hrsg., *Untersuchungen zu Handel und Verkehr der vor- und frühgeschichtlichen Zeit IV: Der Handel der Karolinger- und Wikingerzeit*, Göttingen, 1987, S. 113-97.

- (59) スカンディナヴィア人の襲撃先は、必ずしもスカンディナヴィア世界の外だけではない。Jesch, *op. cit.*, p. 107-18.
- (60) バルト海周辺地域の都市形成を長期的視野から概観したものとして、J. Callmer, “Urbanization in Scandinavia and the Baltic region c. AD 700-1100: Trading places, centres and early urban sites”, B. Ambrosiani & H. Clarke eds., *Developments around the Baltic and the North Sea in the Viking Age*, Stockholm, 1994, p. 50-90, esp. 69-71.; スラヴ世界とスカンディナヴィア世界の交易を含めた交流に関心を払った研究の一例として、市原宏一「外来と土着 考古学資料を基にしたバルト南岸地域史研究の課題」藤井美男・田北廣道編著『ヨーロッパ中世世界の動態像 史料と理論の対話: 森本芳樹先生古稀記念論集』(九州大学出版会 2004)、313-45頁。
- (61) Adam, IV-1, S. 228. ; Porro cum omnis tractus Germaniae profundis horreat saltibus, sola est Iudland ceteris horridior, quae in terra fugitur propter inopiam fructuum, in mari vero propter infestationem pyratarum. Vix invenitur culta in aliquibus locis, vix humanae habitationi oportuna. Sicubi vero brachia maris occurrunt, ibi civitates habet maximas.
- (62) Adam, IV-4, S. 232. ; Civitas ibi magna Odansue, insulae in giro parvulae, omnes frugibus plenae.
- (63) Adam, IV-5, S. 233. ; Haec tam fortitudine virorum quam opulencia frugum celeberrima longitudinem habet bidui, cum latitudo fere sit aequalis.

- (64) Adam, IV-7, S. 234-35. ; Sconia est pulcherrima visu Daniae provincia, unde et dicitur, armata viris, opulenta frugibus divesque mercibus, et nunc plena ecclesiis.
- (65) ヴァイキング時代におけるデンマークの農業状況について知る手がかりは少ないが、次の概論でもデンマーク東西の差異を指摘している。E. Orrman, “Rural conditions”, K. Helle ed., *The Cambridge History of Scandinavia I: Prehistory to 1520*, Cambridge, 2003, p. 254-55.
- (66) ハーラルのキリスト教への改宗について一般的知識は、Sawyer & Sawyer, *op. cit.*, S. 177-79. ; なお、この時期におけるスカンディナヴィア世界のキリスト教化については、L. von Padberg, *Die Christianisierung Europas im Mittelalter*, Stuttgart, 1998, S. 108-37.
- (67) Sawyer & Sawyer, *op. cit.*, S. 174.
- (68) L. Weiland hrsg., *Constitutiones et acta publica imperatorum et regum (911-1197) (MGH Constitutiones I)*, Hannover, 1893, No 6, S. 13-14. ; In nomine sanctae et individuae Trinitatis. Anno ab incarnatione Domini DCCCCXL VIII, indictione VI, VII. Idus Iunii, anno serenissimi regis Ottonis XIII, ipso quoque cum illustrissimo rege Luduico in presentia manente, sancta ac generalis sinodus apud Engilenheim in aeclesia sancti Remigii confessoris Christi, in oago Nahgouui dicto collecta est, presidente videlicet domni Agapiti pape apocriario, ... Iopdago Ripensis ecclesiae episcopo, Oredo Sliewiccensis ecclesiae episcopo, Reginbrando Arhuswensis ecclesiae episcopo, cum cetu abbatum, canonicorum, nec non et monachorum. (訳)「神聖にして不可分なる三位一体の名において。主の受肉より948年、インディクティオー 6年、6月7日、聡明なるオットー王治世の13年、ナーエガウと呼ばれる管区のインゲルハイムにある、神の証聖者である聖レミギウスの教会に、教皇ア



ガピトゥスを司宰者として神聖にして普遍的な教会会議が召集された。…リーベ司教リオプダグス、スレスヴィ司教オレドウス、オーフス司教レギンブランドウスが、修道院長、参事会員、修道士たちとともに同席。」；インゲルハイム教会会議について、H. Fuhrmann, “Die ‘Heilige und Generalsynode’ des 948”, J. Authenrith hrsg., *Ingelheim am Rhein*, Stuttgart, 1964, S. 159–64.

- (69) N・ルンは、この三人の任命は北方政策を進めるオットー 1 世によるデンマーク王（つまりゴーム）への警告であるとする。Lund, Scandinavia, p. 217.；ただし、『事績録』第 1 書 55 節（Adam, I-55, S. 55）では、ウンニ存命時にゴームによってすでにデンマークにいた聖職者が追放されたという情報を伝えている。これが正しいとするならば 936 年以前にすでにデンマークには聖職者が送り込まれていたことになる。しかしながら、すでに可能性を示唆したように、ゴームとグヌーパが並立していた場合、『事績録』の記述はきわめて興味深いものとなる。というのも、前述したようにヴィドキントによってグヌーパは洗礼を受け入れたと伝えられており（Widukind, I-40, S. 57）、そうだとするならばインゲルハイム教会会議決議録にある三司教座のうち彼の支配領域内にあるスレスヴィに聖職者が置かれていたとしても不思議ではないからである。その後ゴームがユラン半島南端部までその勢力をのびしたがために聖職者が追放されたとするならば、ヴィドキントとアダム双方の史料間の齟齬はなくなる。

- (70) H・クラーク&B・アンブロシアーニ（熊野聰監修・角谷英則訳）『ヴァイキングと都市』（東海大学出版会 2001）、61–77 頁。

- (71) T. Sickel hrsg., *Die Urkunden Konrad I., Heinrich I. und Otto I. (MGH Diplomata)*, Hannover, 1879–84, No 294, S. 411.；Idcirco nos, interuentu dilecti archiepiscopi nostri Adaldagi, ac pro statu et incolumitate imperii nostri, quicquid proprietatis in marca vel regno Danorum ad ecclesias in honorem Dei constructas, videlicet Sliesuuigensem, Ripensem, Arusensem, vel

adhuc pertinere videtur, vel futurum acquiratur, ab omni censu vel servitio nostri iuris absoluimus, ut et episcopis prescriptarum ecclesiarum, absque ulla comitis vel alicuius fisci nostri exactoris infestatione seruiant et succumbant, volumus et firmiter iubemus.（訳）「それゆえ、敬愛すべき余の大司教アダルダークの仲介により、余の帝国の安定と安寧のために、デーン人の辺境もしくは王国において神を称揚するために建設された教会つまりスレスヴィ、リーベ、オーフスにこれまで属していた、もしくは将来獲得される所有地はどのようなものであれ、余が法のあらゆる査定もしくは従属から解放し、伯もしくは余が国庫の収税官の侵害なく上記教会の司教たちに従属すべきであることを、希望するとともにかたく命じる。」

- (72) T. Sickel hrsg., *Die Urkunden Otto des III. (MGH Diplomata)*, Hannover, 1893, No 41, S. 440–41.；Omnium fidelium nostrorum, tam presentium, quam futurorum piae devotioni pateat, quomodo nos ob petitionem et interventum dilecti nostri Adaldagi, Bremensis ecclesiae videlicet venerabilis archiepiscopi, ac pro statu et incolumitate regni nostri, quicquid proprietatis in regno Danorum ad ecclesias in honorem Dei constructas, videlicet Sliesuuicensem, Ripensem, Arusensem, Othenesuuigensem uel ad hic pertinere videtur, uel in futurum acquiratur, ab omni censu uel seruitio nostri iuris absoluimus（訳）「プレーメン教会の大司教である余の敬愛するアダルダークの懇請と仲介、そして余が王国の保全および安寧のために、デーン人の王国において神を称揚するために建設された教会すなわちスレスヴィ、リーベ、オーフス、オーデンセに現在属していると考えられるもしくは将来獲得される所有地であれば何であれ、余が法のあらゆる査定もしくは従属から解放する。」；オーデンセ司教座については、T. Nyberg, *Die Kirche in Skandinavien: Mitteleuropäischer und englischer Einfluß im 11. und 12. Jahrhundert*, Sigmaringen,

1986, S. 114.

(73) こうした治世中心地の移動は、ハーラルによるデンマークの統一と密接に関係すると考えられる。Lund, Scandinavia, p. 216. ; 現在コペンハーゲン大学歴史研究所に所属するルン教授は、なぜロスキレが王国治世の首邑として選ばれたのかという筆者の問いに対し、史料による裏付けができるわけではないがハーラル治世後半期のデンマーク王国全体のほぼ中心に位置することが一つの理由ではないかとの示唆をかつて与えてくれた。

(74) Sawyer & Sawyer, A Gormless history ?, p. 691.

(75) Krogh, The royal Viking-age monuments, p. 202.

(76) 現在の石造教会は後世の築造であり、当初は木造教会が建てられていたと考えられる。なお、戦前にイエリングの発掘調査の任を担ったE・デュッグヴェは、イエリング教会が在来宗教の祭祀地であるとの説を展開したが、その後O・オルセンによって斥けられている。E. Dyggve, "Gorm's temple and Harald's stave-church at Jelling", *Acta Archaeologica* 25 (1954), p. 221-39. ; O. Olsen, *Hørg, hov og kirke: Historiske og arkæologiske Vikingetidsstudier*, København, 1966, s. 236-75.

(77) ただしこの小碑文が本来どこに設置されていたのかはわからない。Krogh, *op. cit.*, p. 108.

(78) こうした問題の検討を含めて、ハーラルによる「改竄」の持つ社会的意味の検討は別の場を設ける必要がある。

(79) オットー朝に関する一般的知識は、H. Beumann, *Die Ottonen*, 5. Aufl., Stuttgart, 2000.

(80) DR 55, col. 93-95. ; tufa lEt kaurua kubl mistiuis tutiR uft muþur sina harats hins kuþa kurms kuna sunaR. (訳)「ミスティヴォイの娘トーヴェは、ゴームの息子善者ハーラルの妻であり、その母を記念してこの碑をつくらせた。」

(81) 小澤「エーリク勝利王」、第3章参照。

(82) ドイツとデンマークの関係は、E. Hoffmann, "Beiträge zur Geschichte der Beziehungen zwischen dem deutschen und dem

dänischen Reich für die Zeit von 934 bis 1035", C. Radtke & W. Körber hrsg., *850 Jahre St-Petri-Dom zu Schleswig, 1134-1984*, Schleswig, 1984, S. 97-132. ; ドイツとスラヴ世界との関係は、C. Lübke, *Das östliche Europe (Die Deutschen und das europäische Mittelalter)*, Berlin, 2004.

(83) このような視点からの研究はこれからの課題であるが、出発点として、G. Glaeske, *Die Erzbischöfe von Hamburg-Bremen als Reichsfürsten (Quellen und Darstellungen zur Geschichte Niedersachsens 60)*, Hildesheim, 1962. ; W. Seegrün, *Das Papsttum und Skandinavien bis zur Vollendung der nordischen Kirchenorganisation (1164) (Quellen und Forschungen zur Geschichte Schleswig-Holsteins 51)*, Neumünster, 1967.

(84) C. Krag, "Kirkens forkynnelse i tidlig middelalder og nordmennenes kristendom", H.-E. Lidén red., *Møtet mellom hedendom og kristendom i Norge*, Oslo, 1995, s. 28-50.

(85) C. Feveile, "Von Dänen bis Dänemark von 400 bis 1000 n. Chr.", J. Döring et alii hrsg., *Friesen, Sachsen und Dänen. Kulturen an der Nordsee, 400 bis 1000 n. Chr.*, Franeker, 1996, S. 46-63.

(86) 例えば、オーデンセ近郊に立つ、三面にルーンを刻まれたグラーヴェンドルップ碑文を見よ。DR 209, col. 248-53. ; (Side A) raknhiltr sa ti stainþansi auft ala sauluakupa uial(i)þshaiþuiar þanþia kn. (訳)「ラグンヒルドは、ヴィアの者たちの首領 (goði) であり、従者たちの高貴なるセインであるアッレを記念してこの石を建てた。」 ; (Side B) ala suniR karþu kubl þausi aft faþur sin auk hans kuna auft uar sin in suti raist run aR þasi aft trutin sin þur uiki þasi runaR. (訳)「アッレの息子たちはその父を記念して、彼の妻はその夫を記念してこの記念碑をつくった。ソーテは自らの主君 (dróttinn) を記念してこのルーンを刻んだ。トールがこのルーンに聖なる力を与えんことを。」 ; (Side C) at rita sa uarþi is stain þansi ailti iþa aft anan traki. (訳)

「他の者を記念するためにこの石を傷つけもしくは動かす者は、法外者とされんことを。」

- 87) 本稿は2003年度歴史学研究会3月例会にて口頭発表された内容の一部をもとにしている。討論の場で適切な質疑と有益な助言を与えてくれた加藤玄（東京大学）、菊地重仁（東京大学）、北村直昭（日本学術振興会）、成川岳大（東京大学）、村上司樹（東京都立大学）、そして本稿が世に出る前にいくつかの誤りを指摘してくれた査読者と成川岳大にこの場をかりて感謝の意を表したい。ただし本稿内容に関する責務は全て執筆者に帰される。なお本稿は、平成16年度スカンジナビア—ニッポン—ササカワ財団研究助成による成果の一部である。